

蒔かれた種は花を咲かせる

ドクターウィエンは 小柄でギスギスに痩せて無口な若年医師であった。我々が日本に招待した著名な外科医と一緒にやって来て、滞日何週間かの間、言葉を発したという記憶は余りない。しかし、田舎の我が病院から都会の大病院へ研修に通う道案内役であった小学生の我が息子とは結構親しく笑い合っていた。日本での外科研修をひと通り終えて帰国した彼を待っていたのは、ベトナム戦後米国からの経済制裁を受け貧困に喘ぐ母国での失業であった。



フンドンダナン医療短大に奨学資金を寄付



枯葉剤禍で多発する小児癌に立ち向かう若年医師たちと家族

ベトナムは病院を建てるゆとりもなく、若年医師たちにとって、働き口を確保するのが並み大抵でない時代であった。当院で研修した若年医師の内二名が失業し、製薬会社のプロパーにならざるを得なかった。

そんな時代、私の訪越時に現れるウィエン医師は、痩せて苦しそうで、いつもバイクに乗って会いに来てくれた。私を次の訪問先まで、バイクの後ろに乗せて送って行こう、と申し出てくれたが、余りに痩せた青年のバイクに乗る勇気は私にはなかった。

私と当時日本から運んでいた大量の荷物は、高価なタクシーに乗り、彼ら失業青年医師たちはバイクで追いかけて来る時代であった。

今回はダナン空港が様変わりし、ロシア、中国、韓国、日本等々からの観光客で入国審査はごった返していた。何とか長蛇の列を立ちつくした後、やっと出口に出ると、いつもの可憐な花束が待っていた。そして、何と！何台ものピカピカの乗用車の出迎いで、その中に恰幅の良い中年医師の姿もあった。相変わらず無口で、何回かその車にも乗せてもらい、数時間経って、ようやくそれがあのちっぽけなウィエン青年である事がわかった。



奨学資金送呈式には祝日を押し学校側が待っていた

多忙なチャリティースケジュールの中で、身の上話を聞けるようになったのは、2日目の遅くで、ようやく「今どうしているの？」と恐る恐る聞いた私に、産婦人科病院で職を得て、娘も医学部に通っている。日本観光ツアーは安くなっているから、いつでも日本へ行けるようになった。しかし週4日が当直勤務で夜間緊急手術に忙殺されている一と、働き盛りの医師として、ベトナムの医療を立派に底支えする存在になっている事を伺わせた。こちらから聞く迄は、決して口を開かない性格は変わっていないけれど、少ない言葉の端々に、ベトナムの復興と、辛酸を舐めたけれど、今人生を自力で築き上げている中堅医師としての自信が見て取れた。留学生医師たちの華々しい活躍の陰で、殆ど思い出す事のなかったドクターウィエンの存在は、今回の訪越の中で一番心に残る出来事であった。



小児癌病院の若年医師たちは粘り強い戦いを続けている

国が荒廃から立ち直り、人々が意欲に燃えている、そして 化学兵器の被害者たちを山ほど抱えて若年医師たちが奮闘している。医師にとっては厳し過ぎる現実ではあるけれど、持ち前の粘り強さは健在—それがこの国の変わらぬ印象である。